KOBE YMCA Relief and Aid Activity Report for East Japan Earthquake

神戸 YMCA
東日本大震災復興支援活動報告書

2011−2015

福島の子ども招待キャンプ in 余島　YMCA invited children of Fukushima to Camp Yoshima

Big Heart Project
YMCAs of JAPAN

「Big Heart」は英語で「思いやり」「やさしさ」を意味します。
YMCAは、人々の心に寄り添う支援を続けます。

YMCA Big Heart Projectは、津波による被災地、福島第一原発事故による放射能の影響を受ける地域、そして避難をしている方々が暮らす全国各地で、全国のYMCA・学生YMCA・ワイズメンズクラブが協力して行う、復興のための活動です。

1. 未来を創る子どもたちを育む

子どもや青年が、自分たちの"いのち"を守り、豊かな自然を愛する心を育みます。
そして彼らが、未来を創る主人公となるよう、リーダーシップの育成に努めます。

2. すべての"いのち"が光り輝くように

あらゆる世代の人々のクオリティー・オブ・ライフの向上を支援します。
また福島第一原発事故による影響から、子どもたちを守る努力を続けます。

神戸 YMCA　東日本大震災復興支援活動報告書 2011-2015　2016 年 5 月発行

神戸YMCA　〒650-0002 神戸市中央区北野町1-1新神戸オリエンタルアベニュー2階
TEL : 078-241-7201 E-mail : info@kobeymca.org

Children of Fukushima in Camp Yoshima

長引く影響、私たちにできることは何か？

キャンプディレクター
阪田晃一

震災から2年ほどはまだ地震と津波の記憶が新しく、リフレッシュのために始まったキャンプは「フェリーに乗ると津波を思い出さないか？そもそも海に来てくれるだろうか？」という困惑の中で始まった。しかし実際に募集を開始してみると、定員枠があっという間にいっぱいになり、希望者の全てを受け入れられない状態が続いた。「海を嫌いになってほしくない。海と共に生きていってほしい」保護者の言葉が重くのし掛かった。ある晴れた日に「ねえ、この土は触ってもいいの？（２０１２春）」とキャンパーが言った。そして雨の日には「ねえ、この雨に濡れてもいいの？（２０１３夏）」と聞く。「原発の影響」が私たちの眼の前に現れ始めた。

Ｃａｍｐとは〝Ｆｕｎ〟（喜び）である。私たちはこのことを子どもたちに伝えようと、とにかく一生懸命だった。大きな悲しみと喪失感に苛まれた子どもたちにとって、一番必要なのは「生きていることの喜び」を感じることではないか。若いキャンプリーダーとがむしゃらにアクティビティを楽しみ、共に笑い共に歌を歌って子どもたちを励まし、奮い立たせた。そしてカウンシルファイヤーの火に再会を誓った。しかし子どもたちはどこかで、二度とは訪れないこのチャンス（機会）を噛み締めているように見えた。「福島で頑張ってます。だから心配しないでください（２０１４元旦）」正月に届いた手紙が心を打った。

「ぼくは保養慣れしてるから感動しないんだ（２０１５春）」震災から4年。小学校5年生であれば、その小学生期間のほとんどを原発の影響下で過ごした子どもたちが余島にやってきた。これまでの「リフレッシュ」だけではない、何かを必要としている目をしていた。「この雨は濡れても大丈夫なんだね。福島の雨は汚いから（２０１５春）」と、春の優しい雨に悲しさが響いた。「今の福島県内には価値観の違いから大きな分断があります。福島の人々が心豊かに暮らす事ができるには、どのようにしていかなければならないのか…（２０１５春）」と率直な気持ちを綴った文章が、確実に変化している現状を伝えていた。

「保養は何を生み出したか？（２０１５年７月）」には、70名を超える参加者があった。若いリーダーたちは「保養の今」をリサーチして発表した。これからも長引くこの問題にどうやって向き合っていくべきか、活発な議論が交わされた。

「やっぱり海にお世話になってるから、海の掃除をしたいんだ（２０１５夏）」とあるキャンパーが言った。これまでに無い発言だ。キャンプのテーマは「キャンプにおける一人ひとりの『責任』とは何か？」。キャンプアクティビティだけでなく、ディスカッションによって子どもたちを導いていく。これまでのシンプルな「リフレッシュキャンプ」から、自らが責任を持ってキャンプに関わり喜びを生み出していく「自主運営のキャンプ」に切り替わっていった。ある女の子が「私たちがどれほど、みんなから愛されているかがわかりました（２０１５夏）」という手紙をこっそりと私に運んでくれた。保養で行ったイタリア旅行よりもこのキャンプが好きになったそうだ。私たちは確信した。これからの子どもたちに必要なのは「自分たちで自分たちの人生を生きて行く力」なのだと。

２０１６年春、第６回目となるパートナーキャンプは「リーダーになってまた余島に帰ってくる」という子どもたちの夢を叶えるキャンプとなった。過去参加者の中から参加者を募ったキャンプには、定員の2倍を超える申し込みがあった。「震災での経験を、これからに活かしていってほしい。体験を共有して、一緒に未来のために生きていく」そう願うユースリーダーが今回も集まり献身的に寄り添う姿は、希望の光となって世に降り注いでいた。キャンプ中それぞれが、様々な体験を通して自己を顧み、体験をお互いの財産とした。みな素晴らしいリーダーシップを発揮して仲間たちとキャンプを楽しんでいた。

キャンプ最後の夜、吹き荒れる春の嵐の中、静寂のメインホールで刻んだ時間。「1回目のときは、福島だから、被災したから、被災地だからしょうがなく、キャンプをしてくれてるんじゃないか。その気持ちがすごいおっきくて、とても不安だった。でもこのキャンプは、本当に自分たちのために、被災したからではなくて、自分たちのためにやってくれるんだと。本当にそう思って、参加してよかった。〈中略〉団結とか、勇気とか、そういう言葉が嫌いだった。そんな綺麗な言葉ばかり並べて自分をよく見せようとする人がいっぱいいて。本当はそうじゃないのに。学校ではそんなことばっかりで。リーダーシップは悪い言葉だと思っていた。リーダーシップばっかりとって良くないとクラスで言われた。リーダーシップのとりすぎだ。だから悪い言葉だと思っていた。だから、今回余島でプログラムに「リーダーシップ」って書いてあって、なんで書いてあるんだろう？って。悪いことなのにって。でも、キャンプを過ごして、リーダーシップは悪い言葉じゃないってわかってよかった。…がんばれ福島。っていう言葉も嫌いで、家にいるのもいやで、嫌いで、そんなときにキャンプに出会って、余島にこれた。だから本当に感謝しています（２０１６春）」

私たちに大きな衝撃を与えた東日本大震災。その影響は二次的な広がりを見せてきている。「そこに困っている人がいたら、自分のできることをしよう」これまで見送ってきた多くのキャンパーに伝えたその言葉を、今も自分に向かって言い続けている。

Camp Yoshima with Children of Fukushima

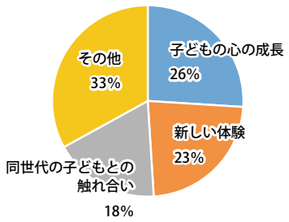
【調査報告】パートナーキャンプから見える「福島の今」

〈概 要〉
参加者アンケート調査
対象：福島の子ども保養プロジェクト&
I'm a Partner Summer 2015
主催：コープこうべ、兵庫県ユニセフ協会、
神戸YMCA
期間：2015年7月26日~30日 4泊5日
於：神戸YMCA余島野外活動センター
回収期間：2015年8月中旬~11月中旬
配布数：63 回答数 44 解答率 70%
キャンプ後に郵送にて参加者全員に配布。
郵送にて回収した。

Q. 余島キャンプで楽しかったことは？
A. 数々のアクティビティをおさえ「グループの仲間との時間」、「リーダーとの出会い」が最も多かった。リフレッシュ体験に加え、心の成長や新しい体験など、「育成」や「交わり」へと変遷している。

Q. 心の成長、何らかの変化
A. およそ80%が、心の成長と何らかのポジティブな変化があったと答えている。「自主性」「積極性」の向上や「自信がついた」と見受けられるコメントも多かった。また「思いやり」や「我慢」、「他人の話を聞くようになった」といった「協調性・社交性」の面でもポジティブな成果が見られた。「リーダーの話に感動して泣いた」「小学生でそんなに感動する体験ができるなんて素晴らしい」という意見もあり、このキャンプのインパクトの強さを示している。

Q. 保養キャンプに期待するもの



避難ファミリーの今、これから

インタビュー

人の心は、人で癒される

リフレッシュファミリープログラム
参加者　佐藤真由美さん

family camp at Rokko YMCA

「母子避難の状態でした。自主避難だから十分な支援もなかった。何より孤独だった。慣れない土地の生活、放射能に気を使う毎日、男の子の扱いが分からず、手に負えない日々が続いていた。神戸に来て楽しいことなんて一つもなかった。そう思っていたんです」と語るのは、東京から自主避難してきた佐藤さん。現在はご主人とお子さん3名と、神戸で暮らしている。現在もなお約16万5千人が避難生活を余儀なくされており（復興庁2016）、佐藤さんのような自主避難も含めると、さらに多くの人々が、未だに元の生活を取り戻せないままでいる。

「そんなときに出会ったのがYMCAのキャンプでした。そこで初めて笑った気がします。自然の中で子どもたちが伸び伸びと遊んでいて、楽しくて」と約2年間の避難生活で、心も体も憔悴しきっていた当時を振り返りかえる。「本当に辛かった。それが子どもにもきっと影響してい…」と言葉を詰まらせた。

2011年の秋から、週末に開催してきたリフレッシュファミリーキャンプには、述べ328名、109組のファミリーが参加した。今では年に2回日帰りのデイキャンプ、2回の1泊キャンプを行う。親と子どもが自然の中で、安心して楽しめる。特にキャンプでは親と子が離れて活動する。子ども同士再会を喜び、大人同士で普段言えないことを語り合える。年に数回会うだけでとても前向きになれると、毎回約30名が参加する。

2016年3月、六甲山YMCAでのファミリーキャンプで聞いてみた。「もし、この体験（震災）を学びに変えるとしたら、子どもたちに何を伝えたいですか？」2014年頃から避難生活での体験を話すようになった佐藤さんは「私は、国が守ってくれる、テレビが放映してくれる、行政が整えてくれると思って生きていました。だからいざ自分で（判断する）となっても考えられなかった。これから子どもたちには『誰かを頼るのではなく、自分で考えて行動する』ようになって欲しいと思います」と力強く語ってくれた。「本当に辛いことは言えないんだなと思いました。でも、人の心は、人で癒される。そのことにも気づきました。私たちは神戸で暮らしていこうと思っています。これからもこのコミュニティ（ファミリープログラム）を大切に、守っていきたいと思います。YMCAには本当に感謝しています。子どもたちが自分の力で生きていける力を、これからも与えてあげて欲しい。」

このファミリープログラムは強力な一つのコミュニティとして、今もなお存在している。避難者と支援者という関係はいつの間にか「自分の力で今を生き抜く子どもたちのため」に集った家族へと変化を遂げた。街頭募金に立ち続ける若者たちがそれを可能にした。

（聞き手　阪田晃一）

Family Camp Programs for earthquake evacuee families

寄稿

東日本大震災 リフレッシュファミリープログラムと私

赤松由梨　社会人（震災当時大学3年生）

リフレッシュファミリープログラムは2012年12月から始まり、この3年半で計15回開催されました。驚くことに、私はそのうち11回参加しています。

このファミリープログラムで様々なご家族と出会いました。会う度に心も身体もちょっとばかり大きくなっている子どもたち。笑顔で「お久しぶりです」と挨拶し、子どもたちの成長を共に喜ぶことができるお父さん、お母さん。このプログラムは避難されてきたご家族に自然の中で心身共にリフレッシュしてもらうことを目的としていますが、いつの間にか私の方がご家族から笑顔や、勇気をもらっています。毎回お会いできることが楽しみで仕方ありません。

参加した11回のプログラムで様々なお話をご家族とさせていただきました。慣れない関西で言葉の違いに悩む子どもたちのこと、母子避難されている方は一人で子どもたちを育てながら、遠く離れたご主人のケアもし、心身ともに疲労困憊であること。原発事故による放射能の子どもたちの身体への影響を心配していること。不安や悩みを聞く一方で、子どもたちがこのプログラムを通して成長していること、年月が経ち少し心身ともに余裕ができて働き始めることができたことなど嬉しいニュースもたくさん聞きました。リピーターのご家族が多く参加される中でお会いし、話を聞く度に、同じ日本人として、人としての責任、使命を感じます。

東日本大震災から5年。風化の兆候がある現在ですが、被災者はあの震災や福島第一原発の影響を今も受けながら生活されています。この先子どもたちに何が待っているのか、親たちは大きな不安を抱いています。年にたった4回ですが、それでもご家族はこのプログラムを楽しみにし、必要としています。私にできることはほんの小さなことかもしれません。手の届く人々は限られているかもしれません。それでも、私の笑顔や想いがご家族に伝わり、それがまた広がって行けば、ほんの少し何か変わるかもしれない。そう願いながら、プログラムに参加しています。私は、私にできることをこれからも探し、考え、続けていきます。子どもたちが未来に希望を持てるように、そして未来を強く生きていけるように。

寄稿

立ち続けた若者たち

震災直後から街頭募金に立ち続けた若者たち。その数は57回を数えます。雨の日も風の日も、数名でも絶やすことなく立ち続けた若者たちを駆り立てたのは「震災を忘れない」という一つの願いでした。名前も知らぬ多くの支援者の皆様に感謝します。

延べ実施回数57回
合計金額 4、395、025円

立ち続けた若者たち1
私が立ち続けるわけ ―パートナーキャンプに参加して

大原萌　社会人（震災当時高校3年生）

一言でいえば「しあわせでいてほしいから」が理由です。5年前の私はとても無力な高校生で、遠く離れた地から不安げに眺めていることしかできなかったのです。大学生になり被災地を実際に自分の目で見て、感じて、人々にふれて、すべてが自分事になりました。パートナーキャンプで出会った出会った子どもたちはどうしてるだろう、元気にしているだろうか、一人ひとりのことを思い出します。誰もが家族や友人、恋人を想うように。

どれだけ遠く離れていようと、私たちは同じ「人」なのです。この東日本大震災は、私たちの問題です。東北には今も人が住んでいて、生活している人々がたくさんいて、様々なことと闘い続けています。

「そばにいる人を守りたい」と誰もが考えるように、私はひとりでも多くの人に幸せになってほしいと思っています。これからの世界を担う子どもたちが、笑顔と、愛と、仲間と、多くのことを感じ、それを隣へ、少しずつ繋いでいくのがこのパートナーキャンプではないかと思います。

手を伸ばせば届く距離。すべてのものがひとつになるために、隣の人と手をつないでいきたいのです。誰もが「あたたかい」と感じることができるような幸せな世界を目指し、今日も私は立ち続けます。

Fund raising Campaign

山元町のプログラム
参加者の声

私は今

いちご農園の岩佐さんとともに　Strawberry farmer in Yamamoto-cho, Miyagi

プログラムの概要

東日本大震災から、ちょうど1年後の２０１２年３月27日～30日。三菱商事株式会社、日本ＹＭＣＡ同盟および仙台ＹＭＣＡ、山元町教育委員会、そして啓明学院中学など多くのご協力を得て、神戸ＹＭＣＡ主催で「ともにいこうキャンプ２０１２」を実施しました。参加者は、東日本大震災で大きな被害のあった宮城県亘理郡山元町の中学生男女16名を神戸に招待し、神戸の中学生、啓明学院中学の男女16名、そして神戸ＹＭＣＡ東日本大震災復興支援リーダー会リーダー7名、そしてスタッフ2名でのキャンプとなりました。

このキャンプは、子どもたちが復興の担い手、リーダーとして育っていくために、共に生きていく仲間とのつながりを作りながら、その勇気と自信が与えられるようにすること目標として実施いたしました。吉本新喜劇を鑑賞したり、六甲山で夜景を見たり、といったリフレッシュする要素をとりいれながら、阪神淡路大震災からの学びを得ながら、これからの東日本大震災の復興を考えてみること、「人と防災未来センター」や神戸の町をめぐるフィールドワークを盛り込みました。最終日の別れ際には涙を流し、再会を誓ってキャンプが終了しました。

被災当時を振り返って

今回のインタビューにて3年ぶりに出会うことができたのは、４月から高校３年生になるという「ともにいこうキャンプの参加者」である高橋里瑳さん（名取北高等学校）、三坂里奈さん（名取高等学校）、岩佐実奈さん（常盤木学園高等学校）、菊地瑠美さん（聖和学園高等学校 薬師堂キャンパス）の4名でした。

彼女たちは、自分たちが小学６年生卒業前に震災にあったときのことを改めて語ってくれました。「お風呂に３週間入れなかったこと」「電気がなくてろうそくだったこと、卒業式がちゃんとできなかったこと」「不自由で心細い、不安定な生活であったこと」。また、「被災した当時は、友達のひどい状況に対して、何て声をかけていいかわからなかった子がたくさんいた。その状況は、今もあんまり変わっていない友人もまだいる。自分が、何をしてあげれるかわからない。」とのこと。

「いつの間にか、あっという間に5年がたった。5年、5年とみんなが言うけど…。という気持ちの方が強い。」「毎年、３月11日が近づくと、心が不安定になる。苦しくなる。やっぱり、いろんなことを思い出すから…。」「この時期、たくさん報道される番組は、正直なところ、全く見たくはない。ただ、震災のことは忘れず伝えていかないといけないぐらい大きなことだったことは理解している。だから、ほかの県だけで放映してほしい。」

「ともにいこうキャンプ２０１２」での出会いを振り返って。

そのような中で、彼女たちは、前述の神戸ＹＭＣＡ主催「ともにいこうキャンプ」に参加することとなります。あのキャンプを今、振り返って以下のように話してくれました。

「私たちは、いろんな保養プログラムがあった中で、神戸ＹＭＣＡのキャンプに行かせてもらってホントに良かった。ホントに楽しかった。」

「楽しいだけではなくて、ホントにみんな優しくて…。今もつながっている人たちがいて。」

「神戸のように復興したいと思った。神戸に住みたいとも思った。神戸に仲間がいると、今も思っている。」「高校の卒業旅行は、神戸、そして関西に行く計画を立てている。もう一度、みんなに会いに行きたい。」

「ともにいこうにいったメンバーと会いたい。あのキャンプで出会った人に、こっちに来てもらうことを、自分たちでできないか、考えたい。」とのことでした。

今、そしてこれから。

「キャンプにも行って、自分たちができることを考えるけど、全てに対して向き合えるというわけではない。何とか伝えていかないといけないことは大事なことは分かるけど…。そのためにできていることは、まだ何もない、何もできていないと思っている」とのこと。彼女たちが住む亘理郡名取市山元町は、まだJR常磐線が復旧していないため、交通機関が不便な状況は今も続いている状況。４名は学校に通うのに1日片道1時間半～2時間かけて通っているとのこと。ようやく２０１６年12月には鉄道が再び開通するそうです。海から離れた場所の陸橋上の高いところに線路は建設されています。

あれから5年が経ちこの4月から高校3年生になって、進路をどうするか?ということと今向き合っているということで、最後に彼女たちの将来の夢を聞きました。

「つい最近決まって、音楽スタジオのスタッフさん（音響補助など）です。そのお仕事は20歳からの募集なので、それまで英語検定やパソコン検定の取得に向けて頑張っています。東京にある会社なので、一人暮らしの練習として料理も少しずつ始めました＼（^o^）／」（三坂里奈 名取高等学校）

「親からこの学科のある学校を勧められこの仕事に興味を持ち始めました。オープンキャンパスなどに行くにつれて新郎新婦と一緒に素敵な結婚式を作り上げていきたいと思うようになり、それが自分の夢となりました。自分は、人と関わることが好きで、またファッション、メイクなどにも興味があります。私の中でこの仕事は向いている仕事だと思いました!」（岩佐実奈 常盤木学園高等学校）

「私の将来の夢はみんなを料理で笑顔にさせられるシェフになる事です。」（高橋里瑳 名取北高等学校）

「私の将来の夢は医療関係の仕事に就くことです。両親が医療関係に勤めているからです。」（菊地瑠美 聖和学園高等学校 薬師堂キャンパス）

（聞き手 ２０１２年ともにいこうキャンプディレクター 坂本孝司）

仙台ＹＭＣＡ 村井総主事の声

「個別化」と「複雑化」の進行が今後の課題

Mr. Nobuo Murai,
GS of Sendai YMCA

仙台ＹＭＣＡは、東日本大震災直後に「仙台ＹＭＣＡボランティア支援センター」を設置し、南三陸、石巻・女川、東松島、山元を対象地域として、全国・海外ＹＭＣＡや関係団体を通して活動するボランティアや物資支援のコーディネートを行なってきました。

仙台ＹＭＣＡが震災後からサポートしてきた亘理郡山元町の岩佐さんにお話しを聞きにいきました。「ＹＭＣＡがなかったら、今はない」と。「ＹＭＣＡの人たちは、みんなホントに優しかった。啓明学院の高校生たちが、いつも暑いときに頑張ってくれた。帰る間際に『私たちはお役に立てたでしょうか?』と聞かれ、涙が出た。あの子たちは本当に素晴らしくて、帰るときに寂しくなって…。」とお話しされていました。

東日本大震災直後から5年間にわたり仙台ＹＭＣＡボランティア支援センターで被災地支援活動をおこなってこられた村井総主事によると、現在被災地では「個別化」と「複雑化」の進行が進んでいることが課題であるとのこと。ようやく人々が話し始める時期になり、今まで浮かび上がってこなかった課題が表面化しているようですが、一人ひとりから出てきた課題が重なり合い、絡み合って複雑な問題となってきているようです。震災直後は「みんなで助け合おう!」という雰囲気でしたが、現在はそれぞれのやり方や状況の違いなどから、困難さが表に出にくくなっているとのことでした。

また、仙台ＹＭＣＡではこれまで津波のあった地区への支援を行なってきましたが、福島へのシフトも考えておられるようです。

「これから私たちにできることは何か?」という質問には、村井さんも「まだわからない」とのこと。ただ「自分たちの体力のこと、できる範囲、できること、これはしっかり考えていきたい。２０１６年までは岩佐さんのところには月1回行き続ける。２０２０年の東京オリンピックを仮設住宅で迎えなければならない人が一人でもいれば、支援活動は継続していきたい」とのことでした。

寄稿

1200人のpartnerがここにいます

啓明学院高等学校　教員　阿部俊

2012年夏の「ダイヤモンドキャンプ」が、「I'm a partner camp」へ名前と形を変えながらも、一貫して福島の子どもたちのために計画されてきたキャンプに、啓明学院高校生をリーダーとして用いてくださったことに感謝です。

中学入学時から、先輩が後輩のリーダーとして生活を共にするキャンプの機会が多い中で鍛えられてきたとはいえ、まだまだ未熟な彼らにとって、遠く離れた福島からやって来る初対面の小学生を相手にリーダーとして関わることもさることながら、特別なねらいと祈りをもって実施されるキャンプであることに、大変な不安と緊張を覚えたようです。しかし5日間あるいは6日間子どもたちと共に過ごし、悩み、もがき、驚きつつも、貴重な学びと気づきを与えられる体験に恵まれ、なかには子どもたちを通して、「フクシマ」と出会った者もありました。学院のチャペル礼拝においてその経験を語った参加生徒の、「きみたちもpartnerになれる」との呼びかけに応え、2015年度には生徒会が中心となって、中学生を含む全校生1200名余が続けてきた毎月11日の募金を、些少ではありましたがこのキャンプのために捧げることができました。このプロジェクトを通して、極めて大切な朽ちない財産をいただいたことに心から感謝いたします。

寄稿

パートナーキャンプと私

啓明学院卒、関西学院大学2年生　小牧陽輔

「I'm a partner camp」に出会っていなかったら、私はどんな高校・大学生活を送っていただろう。パートナーキャンプに携わるようになって5年目となった今もふと考える。私にとってパートナーキャンプは、人生の中での大きなきっかけである。たくさんのチャンスをいただき、重要な役割を任された。ここでは書き切ることができないくらい本当にたくさんのことを学んだ。多くの人と出会い、また新しい自分を見つけることができた。

キャンプを重ねていくにつれて「震災復興」という言葉の難しさを感じる。特に、パートナーキャンプには福島の子どもたちが余島にやってくる。子どもたちから語られる言葉1つ1つには、他とは違う重みがある。その言葉に毎回のキャンプで心を動かされる。パートナーキャンプは彼らが「勇気と希望」を感じることができるキャンプだと確信している。パートナーキャンプを通して、余島でたくさんのことに挑戦し、経験し育てられた彼らはきっとそれぞれの場所で輝いていると信じている。私自身も彼らと同じようにこのキャンプを通して育てられた。パートナーキャンプは、「人を育てるキャンプ」なのかもしれない。このキャンプで育った全ての人が、それぞれの場所で自分のできることを見つけ活躍してほしい。そしてまたいつか再会できる日を期待している。パートナーキャンプに出会うことができて本当に良かった。これまでキャンプにご協力いただいた全ての方々に感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。

インタビュー　立ち上がった支援者

キャンプから、世のリーダーを！

Ladies & Gentlemen よしましょ　代表　中山豊美さん

「震災と同じ年、2011年に骨折していつも楽しみにしていた余島にいけなかった。暗い世の中。（病院の）ベッドで寝ているとふと『世の中のリーダーがいない』ことを憂いて、いてもたってもいられなくなった。でも動けなかった」と語る中山さんは、2012年9月に任意団体「Ladies & Gentlemen よしましょ」を立ち上げ、余島への寄付を通して社会貢献を実現している。

「（骨折を機に）文句ばかり言わず、社会のためになにかしよう、自分ができることを。と思った。私にできることはやっぱり余島（キャンプ）に多くの人が来て、リーダーとして育ち、巣立っていくことを助けることだ。と思った」と当時を振り返る。

自身もキャンパーで、多感な中高生の夏休みを余島で過ごした。そこで今井鎮雄キャンプ長に出会い、人生が変わった。「今まで生きてきた人生の中で一番自信のあること。それが余島キャンプだった。YMCAだった。純粋にそれだけ。自信がある」。

寄付のお願いは、仲間とともに100名を超える知人にリーフレットと共に手書きのメッセージを添えて送った。

2013年第1回目のお願いには3、181、000円が集まり「びっくりした。こんなに応援してくれるなんて」と驚き震えたという。すぐに神戸YMCAが主催するI m a Partnerを知り、支援を決めた。「福島のことはやりたかったけど、方法がわからなかった。（よしましょ）を立ち上げた時、初めは余島の修繕への支援を考えていた。でもその時にちょうどI'm a Partnerを考えていると阪田さん（神戸YMCA）から相談があった」。その後も毎年3回、メッセージを添えて支援者に手紙を送り続ける。多くの支援者が自分自身も喜び、その成果を喜んでいるそうだ。「福島の応援をしたいという人は多かった。寄付の使い道も、福島の子どもたちを自然豊かな余島に招待する。YMCAがキャンプをする。ということでとてもわかりやすく、透明性があった」と毎回の映写報告会も欠かさず行っている。「これからもI'm a Partnerとして、余島のために、余島に来たいけれど来られない子どもたちのために活動を続けたい。もちろん福島の子どもたち以外にも、支援を広げたい」と常に前を向いて進む姿に迷いは無い。

（2016年2月1日自宅にて　聞き手　山本亮司）

寄稿

続・立ち続けた若者たち

立ち続けた若者たち2

街頭募金に立つ理由

越生寛子 大学1年生
（震災当時中学3年生）

私が神戸YMCAの街頭募金に参加するようになったのは、I m a Partner Campでリーダーをさせていただいたことがきっかけでした。このキャンプは、福島に住む子どもたちを余島に招待し、リフレッシュしてもらうことを目的としたキャンプです。この春のキャンプ（2016）では、この先の福島を引っ張っていけるようなリーダーを養成するという目的も加えられました。このキャンプは、震災が起こった当時のことをメンバー同士で共有し合える場にもなっていました。キャンプを通して皆、仲間と団結することの難しさと大切さを学んでいました。余島を去るときには「リーダーになって余島にもう一度来たい！」、「福島でもリーダーシップを発揮して頑張る！」と言って、福島に帰っていきました。

このキャンプは、福島に住む子どもたちに希望を与え続けてきたと思います。そしてこれからも希望を与え続け、仲間と共にこれからの福島を引っ張っていける強い力をより多く育てていくために、続けていくべきだと思います。

そのために私が普段できることは、より様々な人にこのキャンプを知ってもらい、この思いを伝え、支援していただけるように呼びかけることだと思っています。だから私は街頭募金に立つのです。

Fund raising Campaign

神戸の若者の声（ともにいこう参加者、神戸からの声）

今では東日本大震災の報道も少なくなり、阪神大震災のように年一回思い出されるものになっていくのかなと感じています。ただ、ずっと思い続けることは被害にあっていない人には物理的に難しいので、今はそれでいいのではないかとも思います。

私は将来ＡＳＥＡＮとのビジネスを行うような会社で働きたいと思っています。次の災害に対してしっかりと備えながら、万一災害が起きた時には大きな支援を行える仕事に就きたいです。

２０１２ともにいこう参加者
安福夕貴子（関西学院大学国際学部２回生）

■

同年代の友だちが実際に体験した東日本大震災の生の声を聞いた時、あの震災が私の中で現実的になりました。高校時代に参加したボランティアで初めて宮城県を訪れましたが、実際に自分の目で見た現地はあまりに痛々しい状態でした。

遠く離れていても被災地のためにできるただひとつのことは３・１１を忘れずに想うこと、祈ることだと仙台ＹＭＣＡの方が教えてくれました。私は東日本大震災を忘れません。ふとしたときに友だちの顔を思い出すし、宮城で出会った方々、またそのときの気持ちも忘れることはありません。

２０１２ともにいこうキャンプ参加者
山路果実（関西学院大学教育学部２回生）

■

ともにいこうキャンプで出会った友だちがもう高校３年～大学１年になるのかと思うと、時の流れが早いと感じる。仙台の友だちが「あの日のことを忘れたことはあの日から一度もない」と言っていたのが今でも忘れられない。全ての始まりはあのキャンプだった。こんなにも私を考えさせ、行動させるとは思ってもみなかったし、ボランティアに目を向けることもなかっただろう。

震災から５年経った今、キャンプで出会った友だちはいまだに「あの日を忘れたことがない」のだろうか。全てを忘れることが幸せではないとは思うけれど、少しでも辛い記憶がほぐれてくれていたらなあと思う。

２０１２ともにいこうキャンプ参加者
市橋茉緒（関西学院大学教育学部２回生）

■

ともにいこうキャンプに参加した後、私は「I'm a partner camp」にリーダーとして４回参加した。原子力発電所事故の被害により外で自由に遊ぶことのできない福島の子どもたちを小豆島・余島キャンプ場に招いて思いっきり遊んでもらうというキャンプである。

今、私は神戸ＹＭＣＡ震災復興リーダー会で活動をしている。東北・関東からの避難者と共にリフレッシュファミリーキャンプを行ったり、チャリティーランというイベントに出店しながら復興支援のための募金活動を行っている。その活動はこれからも続けていくつもりだ。

２０１２ともにいこうキャンプ参加者
上田雄斗（関西学院大学商学部２回生）

■

ともにいこうキャンプが終わった後も山元町で再会したり、たわいない話から小さな人生相談まで頼ってくれる子どもたちがいて、あのキャンプでの出会いは一生の宝だと感じています。

震災で失ったものは多いけれど、得るものもたくさんあったと思います。今後もどこかで大きな地震が起こり得る世の中ですが、身近にいる人同士のつながりを作りながら、みんなが手を取り合って支え合える社会づくりにつながることを願っています。

神戸ＹＭＣＡ　余島リーダー会ＯＢ
石坂尚太（株式会社スノーピーク）

■

ともにいこうキャンプでは神戸と宮城の中学生が交流を持ち、お互いのつながりを大事にしながら「東日本大震災を風化させない、忘れないことが一番大事」だと自ら考えた答えを出していました。私はこの姿に感動し、遠く離れていてもつながっていることを未だに実感しています。

私は今教員として働いており、東日本大震災でのボランティアについて話をする機会がある時は、このキャンプで学んだ「忘れないことの大切さ」を伝えています。またいつか必ず東北に行こうと考えています。そして彼らと再会する日を楽しみにしています。

神戸ＹＭＣＡ三田センターリーダー会ＯＧ
橘真美（教員）

■

東日本大震災を経験した中学生と阪神淡路大震災で被災した神戸で育った中学生。地域も境遇も年齢も違うメンバーがまさしく「ともにいこう」と固い絆が結ばれたキャンプでした。

自然災害は今後も必ずどこかで発生します。どのように準備し、どう向き合い、自分ができることは何か？をこれから考えていかなければなりません。

私は高速道路の安全を守る仕事に就いています。社会の基盤であるインフラの重要性を再認識したきっかけも東日本大震災でした。私の仕事が少しでも人々や社会の役に立つことがやりがいであり、夢です。

また、ともにいこうメンバーでキャンプができればと思います。

神戸ＹＭＣＡ西神戸リーダー会ＯＢ
山口高志（西日本高速道路株式会社）

パートナーとともに ～That they all may be one.～

私たちは震災当初より、本当に多くの支援者と活動を続けてまいりました。
今後もボランティアの皆さまと共に、歩みを進めていきたいと思います。

学校法人啓明学院

ミッションスクールとして目に見えないものに心を注ぐ教育を実践される啓明学院。
2012年度以降、夏休みと春休みに実施された I'm a Partner Camp において、子どもたちのリーダーとして活動を展開。子どもたちにとってあこがれの存在であり、未来のモデルとなりました。
これからも活動をともにしていければと願います。

神戸市社会福祉協議会

東日本大震災の発生以来、ボランティアバス派遣や宮城の中学生招待キャンプなどで協働をしてきました。2015年度は、2013年度から3年連続し、避難されているご家族対象のリフレッシュプログラムとして、コープこうべとともにエコファームでの収穫体験をともに実施いたしました。

株式会社 光陽社

活動報告書や募金リーフレットの作成にあたり、ご支援をいただいています。多くのパートナーとともに進める様々な活動を、より多くの方々に知っていただくために、今後もよりよいソースを作成していければと願います。

生活協同組合コープこうべ

東日本大震災の発生以来、ボランティアバス派遣や宮城の中学生招待キャンプなどで協働をしてきました。2015年度も、2012年度から継続している福島の子ども保養プロジェクトとして兵庫県ユニセフ協会とともに福島の小学生を余島に招いてのキャンプを実施いたしました。

サントリーホールディングス

夏休み、春休みに実施した I'm a Partner Camp において、大きなご支援をいただきました。移動距離が長く、交通費などの費用も大きくなるプログラムですが、計画通りのキャンプを実施することができました。まだまだ必要とされる、福島の子どもたちへの支援を今後も継続していければと願います。

Ladies & Gentlemenよしましよ

余島応援団として2012年に設立されました。I'm a Partner Camp を実施するにあたり、ファンドレイザーとして延べ200名を超える個人・企業に募金を呼びかけてくださいました。また、キャンプにもボランティアとして参加され、記録 Movie 作成など多大なご支援をいただいています。

ルワンダの教育を考える会

福島を拠点に活動し、ルワンダに小学校を建て、子どもたちの教育をより良くしようと活動されているマリー・ルイズさんが代表を務める会です。I'm a Partner Camp では、地域の学校との連携を担ってくださっています。今後もともに歩んでいければと思います。

5年間の募金報告

Ⅰ．募金収入報告

①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金

	内　訳	
①収入	街頭募金（ワイズメンズクラブ六甲部・震災リーダー会他共同で実施）	4,395,025
	神戸YMCA各ブランチおよび振込み	6,565,623
	神戸YWCA/YMCA合同祈祷週	11,285
	神戸YWCA/YMCAイースター早天礼拝	61,986
	阪神地区諸教会イースター早天礼拝実行委員会	67,685
	日本基督教団主恩教会女性会	20,000
	日本基督教団主恩教会	10,000
	日本基督教団西神美賀多台教会	60,000
	日本基督教団甲南教会ぶどうの会	10,000
	日本基督教団多聞教会	150,000
	神戸市立福池小学校マラソンクラブ	46,501
	神戸市立太山寺児童館各種プログラム	112,343
	啓明学院高等学校	387,659
	Ladies & Gentleman よしましよ	7,194,300
	あんしんクリニック	21,558
	ジーンズアロハスタジオ	163,565
	Plus 1 ネット	56,630
	テクノロジーコンファレンス会	137,159
	三輪っ子まつり	33,210
	沙羅の会	27,970
	セールスフォース	41,690
	満長建築工業株式会社	100,000
	にじ屋	51,560
	神戸大学YMCA	650,000
	中国ローンボール協会	37,425
	「うた・こえ」プロジェクト　までい	69,965
	ディンドンリンガーズ	342,325
	神戸ＹＭＣＡベルクワイアー	90,000
	ウエルネスセンター学園都市チャリティプログラム	74,660
	ウエルネスセンター三宮チャリティプログラム	5,478
	YMCA保育園・西神戸YMCA保育園「ワイワイまつり」	50,000
	近江岸建助さんを偲ぶ会	99,247
	神戸ＹＭＣＡ定期総会会場献金	5,500
	神戸ＹＭＣＡセミナー席上献金	42,431
	神戸ＹＭＣＡチャリティラン会場献金	3,237
	神戸ＹＭＣＡ余島クリスマスディ	1,250
	余島キャンプＯＢＯＧ会	712,265
	神戸YMCAむつみ会（職員）	170,000
	神戸ＹＭＣＡ学童プログラム	43,475
	西神戸ＹＭＣＡワイっ子各種プログラム	29,450
	西神戸ＹＭＣＡサンタプロジェクト	13,450
	神戸YMCAサッカー登録メンバーＯＢ会有志	4,500
	西神戸ＹＭＣＡボランティアリーダークリスマス会	17,847
	西宮ＹＭＣＡリーダーＯＢＯＧ有志	5,440
	神戸フリースクール	10,000
	神戸YMCA社交ダンスクラブ	20,000
	西神戸ＹＭＣＡサンタプロジェクト	30,641
	西神戸YMCA幼稚園バザー	150,000
	神戸ＹＭＣＡちとせ幼稚園バザー	60,000
	西神戸ＹＭＣＡバザー	306,809
	パートナーの集い、パートナーキャンプ報告会＆ディスカッション会場献金	14,631

	内　訳	
①収入	神戸ＹＭＣＡ復興支援Ｔシャツ益金	107,894
	兵庫県内避難者相談・交流等支援事業補助金	179,181
	福島県帰還支援事業助成金	559,780
	小計	23,632,630
	(2) ワイズメンズクラブからの寄付	
	芦屋ワイズメンズクラブ	245,503
	西宮ワイズメンズクラブ	24,170
	宝塚ワイズメンズクラブ	539,623
	神戸ワイズメンズクラブ	261,779
	三田ワイズメンズクラブ	20,000
	神戸ポートワイズメンズクラブ	211,908
	ワイズメンズクラブ六甲部	60670
	小計	1,363,653
	(3) 海外からの寄付	
	JCCCNC (US$129,950.00-)	10,675,393
	台中YMCA (US$12,279.00-)	
	シアトルYMCA (US$8,000.00-)	
	チェンマイYMCA	135,356
	Tim O'BRIEN氏	39,232
	韓国仁川ＹＭＣＡ	102,743
	為替相場変動による差益金	3,917,334
	小計	14,870,058
	①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金（2011年3月～2016年2月末日）　収入合計	39,866,341

②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金

	内　訳	
②収入	神戸YMCA少年部OBOG	16,830
	神戸YMCA各ブランチおよび振込み	4,000,000
	神戸YMCAむつみ会（職員）	200,000
	西宮YMCA保育園有志	9,600
	西宮つとがわYMCA保育園有志	17,000
	小計	4,243,430
	(4) ワイズメンズクラブからの寄付	
	ワイズメンズクラブ（個人2名の方より）	50,000
	神戸ポートワイズメンズクラブ	266,920
	宝塚ワイズメンズクラブ	52,617
	六甲部神戸地区西4ワイズメンズクラブ	13,400
	小計	382,937
	②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金（2011年3月～2016年2月末日）　収入合計	4,626,367

Ⅱ．募金収支報告

①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金

	内　訳	
①収入	①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金（2011年3月～2016年2月末日）　収入合計	39,866,341
①支出	(1) 日本YMCA同盟を通して青少年救援・復興活動への支援	
	2011年、2013年、2013年、2014年	4,950,000
	小計	4,950,000
	(2) 自前プログラムの実施	
	被災児童支援制度（2011年、2012年、2013年、2014年）	10,244,288
	心のケア研修会（神戸ＹＭＣＡ）（2011年）	75,140
	現地若者支援プロジェクト/報告会（神戸ＹＭＣＡ）（2011年7月1-2日）	231,270
	協働「被災中学生招聘キャンプ」（神戸）名取市（2011年8月17-20日）	70,779
	協働「被災児童・家族招待キャンプ」（余島）福島（2011年8月10-15日）	100,100
	ボランティア派遣バス（2011年、2012年）	1,622,284
	被災避難家族招待プログラム　余島ファミリープログラム（2011年11月）	350,002
	現地報告会(宮古VC/宮古教会)（神戸YMCA)（2012年2月）	68,120
	被災地派遣訪問	1,906,964
	被災地支援勉強会	50,890
	田沢湖キャンプ（宮古ＶＣ）スタッフ派遣（2012年8月3日～8日）	43,780
	福島の子ども招待キャンプ（ユースリーダー育成プログラム含む）	15,149,634
	福島の子ども保養キャンプin余島（2012年7月29日～8月2日）	498,630
	被災避難ファミリー収穫体験プログラム 神戸市社協&コープこうべ（2013年、2014年、2015年）	52,267
	被災避難者ファミリープログラム（ディキャンプ、キャンプ等）	1,754,165
	福島の子ども招待キャンプ現地報告会・諸団体訪問（2013年1月5～6日）	114,465
	「わすれないふしくま」試写会上映（2013年2月16日）	37,565
	福島に生きる「飯館村の母ちゃん」上映＆トークイベント（2014年6月28日）	59,796
	パートナーの集い（2015年5月31日）	43,000
	未来を創るピースフォーラム（2016年2月22日） コープこうべ＆兵庫県ユニセフ協会	138,600
	小計	32,611,739
	(3) 他団体を通しての支援	
	宮城学院	100,000
	市教委「ネイチャーキャンプ」8/17-18（神戸） 被災避難者家族	130,000
	小計	230,000
	(4) 広報活動	
	ちらし印刷等	310,000
	活動報告書作成	300,988
	支援募金リーフレット作成	189,000
	活動報告書英語版作成	50,000
	小計	849,988

	内　訳	
①支出	(5) 事務諸経費	
	郵送料	10,000
	封筒作成	10,924
	小計	20,924
	(6) その他	
	支援物資送付料等	34,307
	書籍購入	3,564
	小計	37,871
	①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金（2011年3月～2016年2月末日）　支出合計	38,700,522
①東日本大震災ＹＭＣＡ青少年救援・復興募金　収支差		1,165,819
②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金　収支差		-500,000
2016年度への繰越金		665,819

②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金

	内　訳	
②収入	②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金（2011年3月～2016年2月末日）　収入合計	4,626,367
②支出	(1) 日本YMCA同盟を通して被災YMCA復興活動への支援	
	2011年、2013年、2013年、	1,626,367
	小計	1,626,367
	(2) 被災ＹＭＣＡへ直接送金	
	仙台YMCA	3,000,000
	盛岡YMCA	500,000
	小計	3,500,000
	②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金（2011年3月～2016年2月末日）　支出合計	5,126,367
②東日本大震災被災ＹＭＣＡ支援募金　収支差		-500,000

被災児童支援制度

神戸 YMCA では、東日本大震災によって被災した児童の心身の健康な成長を支援することを目的として、2011～2014 年度まで YMCA の日常プログラムやキャンプへの参加費用を助成する支援制度を実施してきました。

被災地と神戸での 2 重生活などで経済的にも厳しい状況にあるご家族が多くいらっしゃる中、少しでも子どもたちが未来への希望をもって、楽しさを味わうことができればとの願いをこめていました。2015 年度より新たに、神戸 YMCA 子ども奨学金制度にて支援しています。

2011～2014年度　延べプログラム参加件数
キャンプ97件
短期講習会55件
日常プログラム51件

5年間の活動年表

神戸YMCA5ヵ年の活動報告（2011年3月11日～2016年3月まで）

2011年3月	11日 14時46分	宮城県太平洋沖で観測史上最大M9.0の地震が発生
	12日	緊急募金を各センターで開始　以降、会員への募金の呼びかけや街頭募金を展開していく
	18日	東日本大震災救援活動サイト（ＷＥＢページ）を立ち上げ、支援の呼びかけを行う
	23日	神戸ＹＭＣＡ内に救援活動チームを発足させる
4月	2-3日	神戸ＹＭＣＡよりスタッフ2名を仙台ＹＭＣＡ、盛岡ＹＭＣＡに派遣。帰神後報告会を実施
	9-12日	神戸ＹＭＣＡ・神戸市社会福祉協議会・コープこうべ三者協同で「ボランティアバス先遣隊」を派遣　仙台の避難所に神戸ＹＭＣＡボランティア・職員を含む21名を派遣。
	13-19日	仙台ＹＭＣＡボランティアセンターへボランティアコーディネーター2名を派遣
	22-25日	神戸ＹＭＣＡ・神戸市社会福祉協議会・コープこうべ三者協同で「ボランティアバス」の募集・派遣を実施。仙台市内のボランティアセンターを中心とした各所での救援活動に従事する。以降１ヶ月間に計３回の派遣を行う
5月		被災者が神戸ＹＭＣＡプログラム参加を助成する制度として東日本大震災被災児童支援制度を制定
6月		神戸ＹＭＣＡ支援活動報告会を実施。活動報告や今後の支援の可能性について、報告・協議を行う。
7月		仙台ＹＭＣＡボランティア支援センターと仙台市社会福祉協議会より、現地での支援にあたっているスタッフを招聘し、現地のレポートや今後の支援についての意見交換会を行った。
		キャンプや復興支援にかかわる人材育成のため「心のケア」研修を行う。（以降継続実施）
	26-29日	神戸ＹＭＣＡボランティアバスを啓明学院高等学校や神戸大学ＹＭＣＡとも共同で宮城県山元町に派遣（40名参加）
8月	10-15日	福島・神戸ＹＷＣＡ協力の下、福島での被災者家族のための余島招待キャンプ「余島冒険わいわいキャンプ」を実施（14名参加）
	17-20日	神戸ＹＭＣＡ・神戸市社会福祉協議会・コープこうべ三者協同で「名取の子どもたちを神戸に招待」事業を実施。名取市の中学生11名を招待し神戸市内各所での観光を通じ、被災児童との交流を深める
9月		米国カルフォルニアでの心のケア研修に全国のＹＭＣＡスタッフが招待され、神戸ＹＭＣＡからもスタッフを派遣する
		仙台ＹＭＣＡ主催の被災児童キャンプに神戸ＹＭＣＡよりスタッフ、リーダーを派遣。（以降、冬季、春季、夏期プログラムへのリーダー派遣を継続して行っている）
10月		復興支援をより能動的に活動するため「東日本大震災復興支援リーダー会」を発足
		被災避難家族を対象としたファミリーウィークエンドプログラムを余島にて実施（6家族）。 11月にも実施（2家族）
2012年2月		盛岡ＹＭＣＡ宮古ボランティアセンターより現地の支援に当たっていたスタッフおよび宮古教会牧師先生を招聘し、ワークショップや報告会を行う。また臨床心理士によるトラウマケアの講習会を実施する。
3月	11日	「3.11揚がれ!希望の凧」を実施（神戸YMCAは須磨海岸にて140名、全国各所で実施）
	27-30日	宮城県山元町の中学生16名を招き啓明学院中学生とともに「ともにいこうキャンプ」を神戸市内で実施、
	28-31日	余島キャンプ場に福島県の小学生39名を招待し「余島ダイヤモンドキャンプ」を実施
5月		復興支援募金呼びかけのため「東日本大震災復興支援Ｔシャツ」を1500枚作成、販売を開始した
7月		「神戸ＹＭＣＡボランティアバス2012」を派遣。神戸大学ＹＭＣＡ、啓明学院高等学校の学生の協力の下、宮城県石巻市、山元町での復興支援を行う。（44名参加）
	7月29-8月1日	余島キャンプ場に福島県の小学生３０名を招待し「余島サマーダイヤモンドキャンプ」を実施
8月	7月29-8月2日	コープこうべ、兵庫県ユニセフと協働で「福島の子ども保養プロジェクトinよしまキャンプ」を実施（30名を招待）
10月	13日	「うた・こえ」支援プロジェクト～までい～において神戸ＹＭＣＡ震災復興支援チームが活動報告を実施。プロジェクト中の募金をすべてＹＭＣＡを通じた支援に募金をいただく。
12月	1日	被災避難家族を対象に「リフレッシュファミリープログラム」を実施（於しあわせの村）野外料理体験など。
2013年1月	28-31日	宮城のびる幼稚園　雪遊びキャンプに神戸ＹＭＣＡリーダーとスタッフを派遣。
2月	16日	映画「わすれない ふくしま」試写会を神戸ＹＭＣＡにて開催
	17日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施（於　六甲山ＹＭＣＡ）。焼き芋体験など。
		2011-2012年に行ってきた復興支援活動報告書を発刊。各応援団体などに配布を行う。
4月	21日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施（於　再度山周辺）ハイキングなど。
6月	15-16日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　三田市野外活動センター）野外料理、蛍見物など
7月	28-8月1日	被災児童招待キャンプとして「I'm a partner camp Summer2013」を開催。福島県在住の小学生を対象に、福島からの道中を含めてよしまキャンプを多くのボランティア、参画団体とともに行う。（小学生40名）また実施に際しては募金目標400万円を越える多くの支援が集まった。同日開催で兵庫県ユニセフ協会・コープこうべと神戸YMCA共催の「福島の子ども保養プロジェクト」も実施。
10月	19日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。三田の農家のご協力の下、枝豆収穫などを行う。
11月	30日	収穫体験プログラムを神戸市社会福祉協議会・コープこうべと3者協働で実施する。（於　コープこうべエコファーム）
2014年2月	16日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。三田の農家のご協力の下、収穫したもので豚汁などをつくる。
3月	8-9日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　六甲山ＹＭＣＡ）ハイキング、キャンプファイヤーなど
	31-4月1日	「I'm a partner camp Spring2014」として福島の子どもを対象とした招待キャンプ実施（小学生34名　中学生6名）
4月	20日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。市ケ原にて野外料理体験などを実施。
5月	31日	「I'm a partner camp」実施準備のキックオフとして「パートナーの集い」を実施。パネルディスカッションなどを行い、学びと絆を深めた。
6月	14-15日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　伊丹野外活動センター）蛍見物、キャンプファイヤーなど
	28日	福島に生きる「飯館村のお母ちゃんたち」映画製作中間報告会を神戸ＹＭＣＡにて実施。
7月	27-31日	余島において「I'm a partner camp Summer2014」を開催（小学生30名中学生3名参加）。また同日開催で兵庫県ユニセフ協会・コープこうべと神戸ＹＭＣＡ共催「福島の子ども保養プロジェクト」も実施。
10月	25日	収穫体験プログラムを神戸市社会福祉協議会・コープこうべと3者協働で実施する。（於　コープこうべエコファーム）
2015年1月	17日	阪神淡路大震災20周年を「共にいたみ、希望に生きる」というテーマの中フォーラムを行い、振り返る機会を持つ中で、支援活動の意義について再考を行った。
2月	7日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。ハイキング後に三田の農家のご協力の下、野外料理を堪能する。
3月	21-22日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　六甲山ＹＭＣＡ）「子ども会議」を行い今後の方向性を子どもたち自らが考える機会を持った。
	31-4月1日	「I'm a partner camp Spring2015」として福島の子どもを対象とした招待キャンプ実施（小学生25名）
5月	23日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。神戸市立森林植物園でハイキングを行う
6月	20-21日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　伊丹野外活動センター）蛍見物、川遊びなど
7月	26-30日	余島において「I'm a partner camp Summer2015」を開催。また同日開催で兵庫県ユニセフ協会・コープこうべと神戸ＹＭＣＡ共催の「福島の子ども保養プロジェクト」も実施。
11月	14日	収穫体験プログラムを神戸市社会福祉協議会・コープこうべと3者協働で実施する。（於　コープこうべエコファーム）
	22日	「リフレッシュファミリープログラム」を実施。三田の農家のご協力の下、収穫したもので豚汁などをつくる。
2016年3月	19-20日	「リフレッシュファミリーキャンプ」開催（於　六甲山ＹＭＣＡ）　昨年度に引き続き「子ども会議」を行う中で、5年間経た中でもまだまだこうした場を求める意見が多数聞かれた。
	29-4月2日	「I'm a partner camp Spring2016」として福島の子どもを対象とした招待キャンプ実施（小学生8名 中高生12名）

ごあいさつ

公益財団法人神戸ＹＭＣＡ総主事
井上真二

Shinji Inoue,
GS of Kobe YMCA

２０１１年３月11日。東日本大震災ならびに福島第一原発事故が発生し、多くの尊いいのちが奪われました。そして、本当に多くの方々にとって、それまでの日常生活が一変し、避難生活を余儀なくされる状況となりました。この状況は今なお続いていることも覚えます。

神戸ＹＭＣＡでは、震災発生直後から職員やボランティアが力を合わせ、また様々な団体と連携し、街頭での募金活動や、現地へのボランティアバスの派遣を開始しました。それ以降５年間にわたり、福島の子どもたちを余島へ招待するリフレッシュキャンプや、現地の中学生と神戸の中学生をつなぐ活動、神戸近郊に避難されている家族を対象としたファミリーキャンプなどを継続して行ってきました。この間、数えきれないほどの方々からのご寄附や活動での支援をいただき進めてこられたことにも、心より感謝申し上げます。神戸ＹＭＣＡだけの力では到底叶わなかった支援を継続することができたのも、このようなお支えがあってこそと確信しています。

５か年計画で実施してきた全体的な支援活動としては一つの節目を迎えますが、私たちは阪神・淡路大震災を経験した者として、復興というものが決して簡単なものではないことを知っています。これからも、福島の子どもたちへの支援や、神戸近郊に避難されているご家族への支援を考え、できうる限りの力を尽くし、寄りそっていきたいと思います。また、この４月に熊本を中心として発生した熊本地震のことも覚えます。自らも被災しながら復興支援活動を継続する熊本ＹＭＣＡのサポートをするべく、全国のＹＭＣＡからスタッフやボランティアが熊本入りしています。今後も継続的に皆さまとともにサポートをしていきたく思います。そして今後起きうる未来の災害に対しても様々な備えをしてまいります。

今なおそれぞれの地で困難な状況にあるお一人おひとりに平安が訪れるようにと心から祈ります。

２０１６年５月